

「歯牙外傷への対応における問題点」

福岡歯科大学小児歯科学講座

教授 本 川 涉

略 歴

長崎県出身

昭和44年 九州歯科大学卒業

昭和45年～47年 九州大学歯学部助手（歯科矯正学講座）

昭和48年 福岡歯科大学助手（小児歯科学講座）

昭和48年～49年 カリフォルニア大学サンフランシスコ校歯学部留学（小児歯科学）

昭和53年 福岡歯科大学講師（小児歯科学講座）

昭和55年 福岡歯科大学助教授（小児歯科学講座）

平成2年 福岡歯科大学教授（小児歯科学講座）

要 旨

乳幼児期の小児は、子供の未熟性、親の育児態度および育児の条件などが原因で事故に遭遇することが多く、これらは年々増加しているといわれている。

したがって、小児における口腔外傷も増加する傾向にあり、患児が低年齢児のために、ややもすると受傷乳歯が安易に抜去され、その結果隣在歯の移動を引き起こしたもの、あるいは十分な観察がなされず、歯髄壊死による歯冠の変色を呈し、そのまま放置された例など、日常臨床で経験することである。これら低年齢児では適切な処置を短時間に行うことが大切であり、普段より歯牙外傷に対する処置方法に術者は熟知していなければならない。

一方学童期の小児では、根未完成永久前歯が受傷することが多く、根未完成であるため将来歯根の正常な形成過程に問題を引き起こす原因となるような思わぬ予後を呈することもあり、とりわけ歯内療法との関わりも深い。したがって、外傷歯では、長期間にわたる予後観察はいうまでもなく、今後もっと歯牙外傷に関して、社会に啓蒙を行う必要性をも感じる。

そこで、今回外傷を受けた乳歯および幼若永久歯の処置方法におけるいくつかの問題点について、文献的考察を交えて述べてみたいと思う。